

【10】老耄年齢

[0] 自覚的になしうるものではないから、ライフステージと呼ぶことは不適切であるが、原始仏教聖典に登場する人物の個人史を考えるとときには必要な項目であるので、これも調査しておく。

[1] 年齢を記して老耄したことを記す資料には次のようなものがある。

[1-1] 原始仏教聖典（A文献）の老耄年齢記事を紹介する。

〈1〉 後世の人民/男/不明（後世人民）/30 歳

『増一阿含』052-009（大正 02 p.830 上）：〔波斯匿〕王夢見大樹生華。後世人民多逢驅役。心焦意惱常有愁怖。年滿三十頭髮皓白《老耄》。

〈2〉 当来世の人/男/不明（当来世の人）/30 歳

『五分律』「雜法」（大正 22 p.172 下）：〔迦葉〕佛言。此十一夢乃爲當來不爲今也。夢中小樹生華者。於當來世有佛。出於百歲人中。名釋迦牟尼如來應供等正覺。爾時人年三十便已頭白《老耄》。夢見華即成果者。爾時二十歲人便已生兒。

〈3〉 釈尊/男/クシャトリヤ（仏）/80 歳

MN.016 Mahāparinibbāna-s. (vol. II pp.100～156)：阿難よ、我は今、年若い (*jiṇṇa*) 年長け (*vuddha*) 高齢 (*mahallaka*) にして、晩年 (*addhagata*) である老衰に達し (*vayo anuppatta*)、我が齢は 80 歳 (*āsītiko vayo*) である。……第 4 禅より起ち、釈尊は直に般涅槃に入られた《老耄/死没》。

SN.047-009 (vol. V p.153)：阿難よ、我は今、年若い (*jiṇṇa*) 年長け (*vuddha*) 高齢 (*mahallaka*) にして、晩年 (*addhagata*) である老衰に達し (*vayo anuppatta*)、我が齢は 80 歳 (*āsītiko vayo*) である《老耄》。

〈4〉 ある人 (*purisa*) /男/不明（一般）/80 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)

MN.012 Mahāsihanāda-s. (vol. I p.082)：舍利弗よ、ある沙門ある婆羅門はこのように見解を抱く。「もし人若く、青年にして、漆黒の髪をもち、吉祥の若さを備え、青年期においてあれば (*paṭhamena vayasā*)、最上の智慧弁才に達するであろう。しかし、もし人、年若い (*jiṇṇa*) 年長け (*vuddha*) 高齢 (*mahallaka*) にして、晩年 (*addhagata*) である老衰に達し (*vayo anuppatta*)、生れてから 80 歳 (*asītika*)、90 歳 (*navutika*)、もしくは 100 歳 (*vassa-satika*) にも到るならば、彼の智慧弁才は衰退する《老耄》と。しかしそれは認められない。我は今、年若い年長け高齢にして、晩年である老衰に達し、我が齢は 80 歳 (*asītika*) である《老耄》。ここに我の四声聞 (*cattāro sāvaka*) は次のごとくあるべし。100 歳を寿命とし (*vassasatāyuka*)、100 歳を生き (*vassasatajīvin*)、最上の行動、最上の気力、最上の智慧弁才に達すべし。

〈5〉 ある女人/女/クシャトリヤ・バラモン・ヴァイシャ/80 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)

MN.013 Mahādukkhakkhandha-s. (vol. I p.088)：比丘達よ、色の患 (*ādinava*) とは何か。たとえばここにかの女 (姉妹, *bhagini*) の、後に生れて 80 歳 (*asītika*)、90 歳 (*navutika*)、もしくは 100 歳 (*vassasatika*) に至り、年若い、

垂木のように曲がり (gopānasivaṅkaṃ) 、……皺が寄り、身体に斑点が生じたかの女を見るならば、いかに思ふか。かつて微妙端麗なるかの女は失せて、患があらわれたと思うであろう。これが色の患である《老熟》。

〈6〉 コーラヴァ (Koravya) /男/クシャトリヤ (王) /80 歳

MN.082 Raṭṭhapāla-s. (vol. II p.069) : コーラヴァ王は尊者ラッタパーラ (Raṭṭhapāla) の問いを肯定して言った、「我は20歳 (visativassuddesika) もしくは25歳 (paññuvisati-vassuddesika) の時、象にても馬にても車にても弓にても刀にても能く行ない、股力あり、腕力あって、戦場の往来者 (saṅgāmāvacara) であった《男盛り・働き盛り》」と。……コーラヴァ王は尊者ラッタパーラ (Raṭṭhapāla) の問いを否定し言った、「我は今、年若い (jinṇa) 年長け (vuddha) 高齢 (mahallaka) にして、晩年 (addhagata) である老衰に達し (vayo anuppatta) 、我が齢は80歳 (āsītiko vayo) である《老熟》」と。

〈7〉 人 (manussa) /男/不明 (一般) /80 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)

MN.130 Devadūta-s. (vol.III p.180) : 閻魔王 (Yamo rājan) が言った、「おい、汝、男子 (purisa) よ、人中において (manussesu) 、女、もしくは男の生れて80歳 (asītika) 、90歳 (navutika) 、もしくは100歳 (vassasatika) となり、年若い、垂木のように曲がり (gopānasivaṅkaṃ) 、……を見ずや《老熟》」と。

〈8〉 一長老/男/不明 (一般) /80 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)

AN.002-004-007 (vol. I p.068) : マハーカッチャーナ (Mahākaccāna) はカンダラーヤナ (Kaṇḍarāyana) 婆羅門に言った。「婆羅門よ、かの釈尊は老地 (vuddha-bhūmi) と壮地 (dahara-bhūmi) とを明らかにされた。婆羅門よ、年長け (vuddha) 、生れて80歳 (asītika) 、90歳 (navutika) 、もしくは100歳 (vassasatika) であっても、諸欲を受用し、欲望の中に住み、欲の熱悩に焼かれ、欲の尋思に食い尽くされ、欲を求めることに熱心であるならば《男盛り・働き盛り》、実に彼は無知な長老と呼称される。婆羅門よ、年若く (dahara) 、漆黒の髪をもち、吉祥の若さを備え、青年期であっても (paṭhamena vayasā) 、諸欲を受用せず、欲望の中に住まず、欲の熱悩に焼かれず、欲の尋思に食い尽くされず、欲を求めることに熱心でないならば《老熟》、実に彼は智者の長老と呼称される。」

〈9〉 釈尊/男/クシャトリヤ (仏) /80 歳

『中阿含』213「法莊嚴經」(大正01 p.797中) : 復次世尊。我亦國王。世尊亦法王。我亦刹利。世尊亦刹利。我亦拘薩羅。世尊亦拘薩羅。我年八十。世尊亦八十。

『増一阿含』026-006 (大正02 p.637上) : 今日如來年已衰微年過八十。

『増一阿含』041-005 (大正02 p.746中) : 吾今年老以向八十。然如來不久當取滅度⁽¹⁾。

(1) 參考資料に次のようなものがある。『増一阿含』048-003 (大正02 p.789上) : 爾時世尊告迦葉曰。吾今年已衰耗。年向八十餘。

〈10〉 波斯匿/男/クシャトリヤ (王) /80 歳

『中阿含』213「法莊嚴經」(大正01 p.797中) : 復次世尊。我亦國王。世尊亦法王。我亦刹利。世尊亦刹利。我亦拘薩羅。世尊亦拘薩羅。我年八十。世尊亦八十。

〈11〉一耆年/男/不明（一般）/80歳（80歳90歳）

『雜阿含』547（大正02 p.141下）：若有耆年。八十九十髮白齒落《老熟》。成就年少法者。此非宿士。雖復青少年二十。色白髮黑。盛壯美滿。而彼成就耆年法者。爲宿士數。梵志問言。云何名爲八十九十髮白齒落。而復成就年少之法。年二十五膚白髮黑盛壯美色。爲宿士數。

〈12〉一士夫/男/バラモン（外道）/80歳（80歳90歳）

『雜阿含』975（大正02 p.252上）：此諸外道論議。說應不應合不合。於聖法律如小兒戲。譬如士夫年八十九。髮白齒落作小兒戲。團治泥土作象作馬種種形類。

〈13〉一老人/男/不明（一般）/80歳

『別訳雜阿含』209（大正02 p.451下）：我佛法中。童男童女。共相聚會。歡娛燕會。隨意舞戲。是名相應。譬如有人。年過八十。頭白面皺。牙齒墮落。然猶歌舞。作木牛馬。作於琵琶箏篴箏笛。亦作小車及踰鞠戲。如斯老人。作如是事。名不相應。

〈14〉一老人/男/不明（一般）/80歳（80歳90歳）

『增一阿含』019-009（大正02 p.595下）：迦遮延曰。正使婆羅門。年在八十九十《老熟》。彼人不止姪欲作諸惡行。是謂婆羅門雖可言老。今在壯地。婆羅門曰。何者年壯住在老地。迦遮延曰。婆羅門。若有比丘年在二十。或三十四五十。彼亦不習姪欲。亦不作惡行。是謂婆羅門年壯在老地。

〈15〉一女人/女/クシャトリヤ・バラモン・ヴァイシャ/80歳（80歳90歳100歳）

『增一阿含』021-009（大正02 p.605中）：云何爲色大患。復次若後見彼女人。年八十九十乃至百歳顔色變異。年過少壯牙齒缺落頭髮皓白。身體垢界皮緩面皺脊偻呻吟身如故車。形體戰掉扶杖而行。云何比丘。初見妙色後復變易《老熟》。豈非是大患乎。

〈16〉一老翁/男/不明/80歳（80歳90歳）

『僧祇律』「雜誦跋渠法」（大正22 p.418上）：爾時諸比丘度八十九十人出家。頭白背偻脊屈隱現。諸根不禁。或小便時大便漏出。進止須人。不能自起。若於房中温室中。洗脚處經行處。短氣連軟洩唾流迸滿。汚僧淨地。爲世人所譏。云何沙門釋子度此老翁頭白背偻歔歔振動。起止須人。出家之人宜應康健。坐禪誦經修習諸業。此壞敗人何道之有。復有人言。汝不知耶沙門釋子出家無父。養此老翁當作父想。復有人言。此諸沙門唯二種人不度。一者死人。二者不欲出家。若不度者。衆不增長。諸比丘以是因緣。往白世尊。佛言。喚是比丘來。來已佛具問上事。汝實爾不答言。實爾。佛言。從今日後太老不應與出家。

〈17〉ある人（purisa）/男/不明（一般）/90歳（80歳90歳100歳）

MN.012 Mahāsihanāda-s. (vol. I p.082) : 〈4〉参照

〈18〉ある女人/女/クシャトリヤ・バラモン・ヴァイシャ/90歳（80歳90歳100歳）

MN.013 Mahādukkhakkhandha-s. (vol. I p.088) : 〈5〉参照

〈19〉人（manussa）/男/不明（一般）/90歳（80歳90歳100歳）

MN.130 Devadūta-s. (vol. III p.180) : 〈7〉参照

〈20〉一長老/男/不明（一般）/90歳（80歳90歳100歳）

- AN. 002-004-007 (vol. I p.068) : 〈8〉 参照
- 〈21〉 一耆年/男/耆年の人/90 歳 (80 歳・90 歳)
- 『雑阿含』 547 (大正 02 p.141 下) : 〈11〉 参照
- 〈22〉 一士夫/男/バラモン (外道) /90 歳 (80 歳 90 歳)
- 『雑阿含』 975 (大正 02 p.252 上) : 〈12〉 参照
- 〈23〉 一老翁/男/不明/90 歳 (80 歳 90 歳)
- 『僧祇律』 「雜誦跋渠法」 (大正 22 p.418 上) : 爾時諸比丘度八十九十人出家。
.....
- 〈24〉 一老人/男/老地の人/90 歳 (80 歳 90 歳)
- 『増一阿含』 019-009 (大正 02 p.595 下) : 〈14〉 参照
- 〈25〉 一女人/女/クシャトリヤ・バラモン・ヴァイシャ/90 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)
- 『増一阿含』 021-009 (大正 02 p.605 中) : 年八十九十乃至百歳顔色變異《老熟》。
- 〈26〉 ある人 (purisa) /男/不明 (一般) /100 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)
- MN.012 Mahāsīhanāda-s. (vol. I p.082) : 〈4〉 参照
- 〈27〉 ある女人/女/クシャトリヤ・バラモン・ヴァイシャ/100 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)
- MN.013 Mahāduk-khakkhandha-s. (vol. I p.088) : 〈5〉 参照
- 〈28〉 人 (manussa) /男/不明 (一般) /100 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)
- MN.130 Devadūta-s. (vol. III p.180) : 〈7〉 参照
- 〈29〉 一長老/男/不明 (一般) /100 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)
- AN.002-004-007 (vol. I p.068) : 〈8〉 参照
- 〈30〉 一女人/女/クシャトリヤ・バラモン・ヴァイシャ/100 歳 (80 歳 90 歳 100 歳)
- 『増一阿含』 021-009 (大正 02 p.605 中) : 年八十九十乃至百歳顔色變異《老熟》。
- 〈31〉 Brahmāyu/男/バラモン/120 歳
- MN.091 Brahmāyu-s. (vol. II p.133) : その時ミティラー (Mithilā) にブラフマーユ婆羅門が住んでいた。年老い (jīṇṇa) 年長け (vuddha) 高齢 (mahallaka) にして、晩年 (addhagata) である老衰に達し (vayo anuppatto)、生れて 120 歳 (vīsaṃvassasatiko jātiyā) であり、字彙と儀軌 (nighaṇḍukeṭubha) を含む、語源論 (akkharappabheda) を含む古伝説 (itihāsa) を第 5 とするヴェーダに通達し (tiṇṇaṃ vedānaṃ pāragū)、聖句の通曉者 (padaka) にして文典家 (veyyākaraṇa) であり、世間論 (lokāyata) 及び大人相 (mahāpurisalakkhaṇa) において完全であった。……ブラフマーユ婆羅門は釈尊の三十二相を調べた後、随順説を聞き、……釈尊が去られて間もなく亡くなった《老衰/死亡》。
- 〈32〉 Pasenadi 王の祖母 (Ayyakā) /女/王の祖母/120 歳
- SN.003-003-002 (vol. I p.096) : (パセーナディ王) 「我が祖母 (Ayyakā) は年老い (jīṇṇa) 年長け (vuddha) 高齢 (mahallikā) にして、晩年 (addhagata) である老衰に達し (vayo-anuppatto) 《老熟》、生れて 120 歳 (vīsa-vassa-satikā jātiyā) にして命終した《死没》。
- 〈33〉 2 老人/男/バラモン/120 歳
- AN.003-006-051 (vol. I p.155) : 時に 2 人の婆羅門いた。年老い (jīṇṇa) 年長

け (vuddha) 高齢 (mahallaka) にして、晩年 (addhagata) である老衰に達し (vayo-anuppattā) 《老熟》、生れて 120 歳 (vīsaṃvassasatikā jātiyā) であった。……しかし、未だ徳を為さず (akatakalyāṇa)、善を為さず (akatakusala)、恐怖からの避難所を作らず (akatabhīruttāṇa)、……。

〈34〉一梵志/男/バラモン/120 歳

『中阿含』157「黄蘆園經」(大正 01 p.679 中)：爾時鞞蘭若梵志年耆宿老。壽將欲過命垂至盡。年百二十拄杖而行。……我今自歸於佛法及比丘衆。唯願世尊受我爲優婆塞從今日始終身自歸乃至命盡。

〈35〉那拘羅/男/ヴァイシャ/120 歳

『雜阿含』107 (大正 02 p.033 上)：爾時有那拘羅長者。百二十歳。年耆根熟。羸劣苦病。而欲覲見世尊及先所宗重知識比丘。來詣佛所。

〈36〉商主/男/バラモン (外道出家) /120 歳

『雜阿含』978 (大正 02 p.253 上)：爾時那羅聚落有商主外道出家。百二十歳。年耆根熟。爲那羅聚落諸沙門婆羅門長者居士。尊重供養。如阿羅漢。……佛告商主外道出家。汝今可得於正法律。修行梵行。出家受具足。成比丘分。如是出家已。思惟乃至心善解脫。得阿羅漢

〈37〉梵摩/男/バラモン/126 歳

『中阿含』161「梵摩經」(大正 01 p.689 中) ⁽¹⁾：此彌薩羅 (Mithilā) 國所有梵志居士者。梵志梵摩於彼最第一。謂壽命故。梵志梵摩極大長老。壽命具足年百二十六。

(1) 【資料集 1-2】p.166 および p.253 では p.161 中としているが p.689 中の誤りである。

〈38〉薄俱羅/男/不明/160 歳

『根本有部律』「藥事」(大正 24 p.082 下)：我年百六十不曾身有病《老熟関連》

[1-2] 後期原始仏教聖典 (B 文献) の老熟年齢記事を紹介する。

〈1〉ある比丘/男/不明/60 歳 (比喻)

Jātaka 491 Mahāmora-j. (vol.IV p.342)：〔主分〕「辟支佛は手を挙げて頭に觸つた。すると、家居の標は消え失せて、出家の標が現われた。彼は 60 歳 (saṭṭhivassa) の長老のように ⁽¹⁾ 衣を着て、8 つの必需品を持って、『御身は私の偉大な救主であつた』と孔雀王に合掌を爲し……」

(1) ここでは 60 歳といているが、一方の〈6〉の用例では 100 歳の長老のようにと
いい (378 *Darimukha-j.* vol.III p.238)、こちらは法臘のことを指しているとも考えられる。

〈2〉一梵志/男/バラモン/60 歳

『六度集經』11 (大正 03 p.006 中)：〔波耶王〕遁邁入山坐一樹下。有梵志來。其年六十。問王曰。彼仁國王萬福無恙乎。答曰。彼王已喪命矣。梵志聞之頓地哀慟。王問之曰。汝哀何甚重乎。答曰。吾聞彼王仁逮群生潤如帝釋。故馳歸命。而彼凋喪。吾老窮矣《老熟》⁽¹⁾。

(1) 参考資料に次のようなものがある。『大莊嚴論經』70 (71) (大正 04 p.339 中) では、「一老婆羅門」とあるのみで、年齢を示さず。また『雜譬喻經』道略集 34 (大正 04 p.530 上) ではただ「婆羅門」、『大智度論』(大正 25 p.146 中) では「遠

国婆羅門」、『大唐西域記』（大正 51 p.883 上）では「貧婆羅門」。

〈3〉一老父/男/ヴァイシャ（？）/60 歳

『雜宝藏經』16（大正 04 p.456 中）：當知往昔波羅捺國。有不善法。流行於世。父年六十。與著敷屨。使守門戶。爾時有兄弟二人。兄語弟言。汝與父敷屨。使令守門《老熟》。屋中唯一敷屨。小弟便截半與父。而白父言。大兄與父。非我所與。大兄教父使守門。兄語弟言。何不盡與敷屨。截半與之。弟答言。適有一敷屨。不截半與。後更何處得。兄問言。更欲與誰。弟言。豈可得不留與兄耶。兄言。何以與我。弟言。汝當年老。汝子亦當安汝置於門中。兄聞此語驚愕曰。我亦當如是耶。弟言。誰當代兄。便語兄言。如此惡法。宜共除捨。兄弟相將。共至輔相所。以此言論。向輔相說。輔相答言實爾。我等亦共有老。輔相啓王。王可此語。宣令國界。孝養父母。斷先非法。不聽更爾

〈4〉釈尊/男/クシャトリヤ（仏）/80 歳

『根本有部律』「雜事」（大正 24 p.238 中）：復次世尊我是憍薩羅王。佛亦住憍薩羅。我生刹帝利種。佛亦刹帝利種。我已年事高邁。壽過八十。世尊亦爾壽過八十《老熟》。我是灌頂刹帝利王。世尊亦是無上法王。

〈5〉波斯匿/男/クシャトリヤ（王）/80 歳

『根本有部律』「雜事」（大正 24 p.238 中）：復次世尊我是憍薩羅王。佛亦住憍薩羅。我生刹帝利種。佛亦刹帝利種。我已年事高邁。壽過八十。世尊亦爾壽過八十《老熟》。我是灌頂刹帝利王。世尊亦是無上法王。

〈6〉ダリームカ/男/バラモン（司祭官の子）/100 歳（比喻）

Jātaka 378 Darimukha-j. (vol.III p.238)：〔主分〕ダリームカは面前に一葉の枯葉がひらりと落ちて来るのを見て、諸行無常を悟り、三宝印を覚得し、辟支仏の境地に悟入した。その瞬間、彼の居士の相は滅して、直ちに八要具を具足し、行住坐臥の威相を成じて 100 歳（*vassasatika*）の長老のようになり、神通力によって虚空を飛翔し、雪山中のナンダムーラ岩窟に去った。

〈7〉寿命/100 歳 ⁽¹⁾

Jātaka 498 Citta-Sambhūta-j. (vol.IV p.390)：〔主分〕この世に於ける人間の命寿／実に 10 の 10 年／然もその極限に到らざるに／あたかも切られし蘆のごとく萎むなり。

(1) 「人壽 100 歳」とする資料は【資料集 1-2】pp.267～268、【資料集 6】pp.266～267 参照。

〈8〉寿命/100 歳

Jātaka 537 Mahāsutasoma-j. (vol.V p.456)：〔主分〕聖者は聖者と相い結ぶべく／智慧者は智慧者と相い結ばなむ／吾が無病の 100 歳を見よ／この第 1 の恵与を吾は授くべし ⁽¹⁾。

(1) 対応經に次がある。

阿夷/男/道人/100 余歳

『異出菩薩本起經』（大正 03 p.618 上）：國中有一道人。年百餘歲。大工相人。字爲阿夷。寧可俱行相太子。……太子有三十二相。神光表現。道人即垂泣而悲。……道人曰。昨日天地振動。正爲太子。我傷年老《老熟》。今我當去世《死没闕連》。恨不

待此人。恨不聞是人經戒。以故悲泣。

〈9〉 福増/男/ヴァイシャ/100 歳

『菩薩本生鬘論』（大正 03 p.343 下）：佛在世時。王舍城中有一長者。名曰福増。年過百歳齒衰力屈《老熟》。家中大小無不生厭。聞説出家心生歡喜。功德無量譬喩不及。出家之利。高於須彌。深於巨海。廣於虛空。所以然者。由出家故方得成佛。三世諸佛未有不因捨家出家成佛者也。是時長者來詣佛所欲求出家。値佛遊化。即便往至舍利弗所。見其熟老不爲攝受。……時彼長者即出寺外發聲大哭。於是世尊從後而至。種種誨喩令其心悅。即語目連。收其出家與受其戒。

『賢愚經』 23（大正 04 p.376 下）：爾時世尊。在王舍城迦蘭陀竹園。時王舍城。有一長者。名尸利苾提（秦言福増）其年百歳。聞出家功德如是無量。便自思惟。我今何不於佛法中出家修道。即辭妻子奴婢大小。我欲出家。其人老耄《老熟》。家中大小。莫不厭恠。輕賤其言。無從用者。聞欲出家。咸各喜言。……《比丘》……《阿羅漢》……。

〈10〉 寿命/120 歳

Jātaka 155 Gagga-j. (vol. II p.015) : 〔主分〕 ガッガよ、100 年生き／更に又 20 年生きよ／怪鬼我を喰うことなかれ／汝〔ガッガ〕よ、生くること 100 年なれ。

〈11〉 須跋陀羅/男/比丘/120 歳

『大方便仏報恩經』（大正 03 p.137 上）：瞿曇沙門、徒衆無尊卑、五百弟子各稱第一。……極老須跋陀羅年百二十《老熟/出家》亦入其中。

[2] 上記を統計的に分析すると次のようになる。

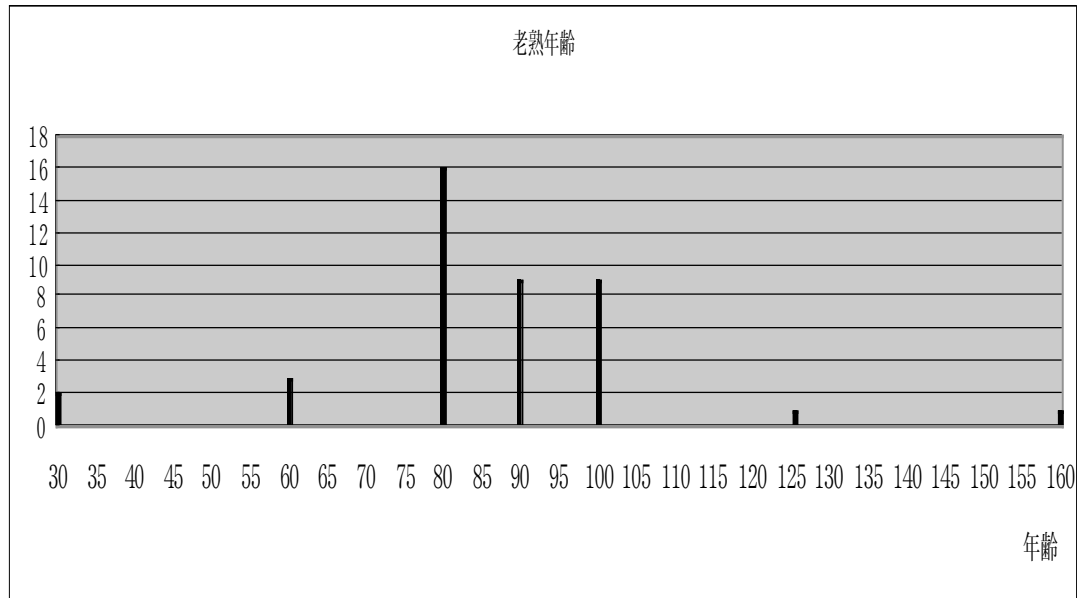
[2-1] 老耄年齢の A 文献・B 文献資料を度数分布表にしてみると以下のようなになる。

《老耄年齢》

年 齢	A. 原 始 仏 典				B. 後 期 仏 典				総 計
	パーリ		漢 訳		<i>Jātaka,</i> <i>Apadāna</i>		本縁部・ 根本有部律		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
30			2						2
60					1			2	3
80	5	1	7	1				2	16
90	3	1	4	1					9
100	3	1		1	3			1	9
120	3	1	3		1		1	1	9
126			1						1
160			1						1
平 均	95	97.5	90.3	90	96		120	83.3	94.3

最頻値	80	—	80	—	100		—	—	80
総 計	14	4	18	3	5		1	6	50

〔2-2〕 上記の表をヒストグラムで表すと次のようになる。



〔2-3〕 A文献（39件）、B文献（11件）の男女を合わせた老熟年齢の最頻値は80歳（度数16〔相対度数32.00〕）である。文献別ではA文献は80歳（度数14〔相対度数35.90〕）、B文献では100歳（度数3〔相対度数25.00〕）である。またヒストグラムでは男女を分けて示さなかった。

平均を出せば、A文献は89.6歳、B文献は91.7歳、A文献・B文献を合わせた平均は94.3歳である。なお30歳とするA文献の〈1〉と〈2〉は、夢の中に現れた後世の人々のありさまであるからこれを除外すると、A文献の平均は96.1歳となり、A文献・B文献を合わせた平均は97.0歳となる。

〔3〕 上記資料にもとづいて若干の考察を加える。

〔3-1〕 上記資料における「老い」は、「高齢」「晩年」「衰微」「髪白齒落」「背が曲がる」などと表現されるから、今でいえば後期高齢者のイメージであろう。上記の統計的処理による老耄の平均年齢は90歳を超えるが、これは実年齢というよりも、「80歳、90歳、100歳の老人にもなって」というように譬喩的に使われる用例が多いからであって、現実的に理解すれば、老耄イメージは最頻値の80歳であったとあってよいのではなかろうか。当時は次項で紹介するように幼少期において死亡することが多く、平均寿命はおそらくは30歳代であったであろうが、成人に達してからの平均余命はかなり高く、60代はかくしゃくとしていたのであろう。そうして70代に入り、80歳に近づく頃から老耄年齢というイメージがあったのではなかろうか。A文献の〈3〉資料は釈尊が80歳の誕生日⁽¹⁾を迎えられたときの感慨を表したものであるが、それが一般的なものであったのであろう。

(1) 入胎から数えたものであって、これが80歳の誕生日の感慨であったことは、「モノグラフ」

第1号に掲載した【論文3】「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」を参照されたい。